



るるるるる



2025 年
9 月
No.933

■発行所■
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631
■ウェブサイト■ <https://jelc.or.jp/>
■E-mail■ jelc@jelc.or.jp
■発行人■ 竹田大地 koho@jelc.or.jp
■印刷人■ 精文堂印刷株式会社
■定価■ 1部 40円(郵税を含む)
■振替口座■ 00190-7-71734

説教「創り主ファースト」

アメリカ福音ルーテル教会宣教師・神水教会・松橋教会・熊本教会国際礼拝牧師・九州ルーテル学院インターナショナルスクール小学部 安達均

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」(ルカによる福音書14・26)

1980年代は、私は日本光電という会社で、医用電子機器を開発する仕事に従事していました。いつしよに開発を担当したメンバーに、「MEN FIRST」(メンファースト)という言葉をお聞きしました。この言葉、一見、差別用語に聞こえ、「いったいどういうことか」と思う面があります。しかし、彼は決して「男性優先」という意味ではなく、「MEN」は男女に関係なく、「人間、人類」という意味だと言っていました。自分たちがデザイン・設計・生産する製品が、第一に人類にとって使いやすく、役立つものにするという意味を込めて、仕事に取り組んでいたのです。

主イエスは、ついでに来る弟子や大群衆に向かって「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、さらには自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」と言われているのです。この言葉、「いったいどういうことか」と思い、違和感さえ覚える方がいらっしゃると思います。しかし、主イエスが、真にわたしたち人類を愛し、教えてくださっていることが何であるか祈る中で、御言葉をじっくり聴くことの大切さがあります。そして、救い主イエスの言葉が、すばらしい、普遍的な正義に立つた、本物の喜びに招いてくださっていると思うのです。

与えられた聖句は、私たちが愛するがゆえに、主イエスが十字架へ向かう旅の途中で、弟子たち、そして群衆へと話された教えやたとえ話の一部です。イエスのこれらの話には、一貫したテーマがあるようです。御国はどんなところかを、たとえをつかって説明し、その御国の喜びに向かって歩むように招いてくださっているようです。

知全能なる創り主を忘れてしまい、家族や自分をファーストにしていなかったら、家族や自分の命も憎まなければならないと話された言葉もわかつてくるように思うのです。

自分の家族や、自分の命を「憎まないなら」という言葉、「憎む」とはそもそもどういうことなのでしょう。自分の家族を愛すること、自分の命を大事にすることは、とても大切なことです。しかし、一番大切な方が、天と地を創られ、やはり創造された植物、鳥、動物、さらには人間が生きていくことができる環境、空気を創り続けてくださっているのです。その全



「世の光 The Light of the World」
ウィリアム・ホルマン・ハント作
1851年～1856年
マンチェスター市立美術館

婚宴に招かれているのは、神が愛している人類全員です。ひとりひとは、この世では、身分は違いますが、文化も異なります。身近な家族や、この世の同胞と言われる人々ばかりではなく、自分にとっては敵だと思っていた人だつて含まれます。自分の気の合う人ファーストとか、この世で自分が住んでいる国



ファースト、ではないわけ

今でもたまに見かける1万円札の肖像となつていた福沢諭吉は、自分の子どもたちに「ひびのおしえ」というものを書いていました。その中に「てんとうさまをおそれ、これをうやまひ、そのころにしたがふべし。たゞし、こゝにいふてんとうさまとは、にちりんのことにはあらず、西洋のことばにてこつど(GOD)といひ、にほんのことばにほんやくすれば、ざうぶつしゃといふものなり。」(※注(GOD)筆者加筆)という言葉が残っているのです。日本の近代化に向けた教育機関、慶応義塾のために雇われた英語教師から聖書に触れる機会を得て、福沢諭吉も聖書の言葉に大きな影響を受けていたと想像します。

御国でも、この世においても、創り主ファーストという思いを忘れずに、自分も、家族も、この世のすべての隣人も大切にして喜び、祈り、感謝して、この時代を歩めますように。アーメン。

命のことば



伊藤賢士奈
⑥まことのぞむ

「なぜうたれるのか、わたしの魂よ／なぜ呻くのか。神を待ち望め、わたしはなお、告白しよう／御顔こそ、わたしの救い。」(詩編42・6)

まだ連絡が来ない、予定がどんどん立てられない、ホントに待つて大変。不思議なことに、今月になつて焦りだした。連絡があると思うから、ないといライラしてしまふ。先月はなんとも思っていないが、たのに、と考えると、ときに急に思い出したことがあった。

でも、時間つてどこから来るのでしょうか。時計からうもしかして、いろんな仕事や、さまざまな予定を詰め込んでしまひ、予定通り行かないといライラしてしまつたり怒つたり…。

それは、何年か前に読んだ不思議な少女の話だつた。その物語では人々は知らない間に時間どろぼうに自分たちの持つている時間を支配されてしまひ、気づかない。しかし、それは大変なこと。人々が時間に支配される前、今まで通り人々に時間を返すために

少女がいつも通りに過ごす大切さを伝えていく。少女は、特別何をするわけでもない。ただただ何もしないことの大切さを伝える。今、私は時間どろぼうに時間を取られてしまつてはいないだろうか。時間どろぼうは、実際には居ないかもしれないけど、時間に支配されていることは少なくないような気がする。

でも、時間つてどこから来るのでしょうか。時計からうもしかして、いろんな仕事や、さまざまな予定を詰め込んでしまひ、予定通り行かないといライラしてしまつたり怒つたり…。

それでも「今」というかけがえない時は与えられています。あなたがどんなにライラして過ごしていたとしても、ボーっと時間が過ぎたとしても、大切な誰かと過ごして短く感じたとしても、それは一人二人に与えられるかけがえない時間。時間にあなただけが支配されているのでも、支配するものでもなく、あなたに与えられています。



リレーコラム

「全国の教会・施設から」②8

■日本福音ルーテル
横浜教会

亀本明美

(日本福音ルーテル
横浜教会代議員)

横浜は日本のプロテス

タント教会発祥の地であり、ルーテル教会も1947年より牛島義明牧師がスタイワルト宣教師と共に東京地方での開拓伝道を開始しました。その年、牛島牧師が国立療養所を慰問した際、戦時中に中国で知り合った坂間保治氏と再会し、坂間氏宅(保土ヶ谷区)にて家庭集会を開始。1948年3月には「日本福音ルーテル横浜教会」の表札を掲げ、毎週礼拝が行われるようになりました。同年11月の全国総会で教会設置が承認され、1949年に正式に成立します。

その後、礼拝場所は保

土ヶ谷から浅間町、三ツ沢を経て、1956年に松ヶ丘に定着。地域に親しまれ、礼拝出席者は時50名を超え、4人の牧師を輩出するほどに成長しました。1963年以降は横浜・横須賀・日吉の3教会合同による礼拝や親睦会、修養会などが開催され、豊かな交流を重ねまし



たが、次第に教会間のつながりが薄れ、そのころを語る方が少なくなった現在では、礼拝出席は十数人へと減少しています。

2024年4月より河田優牧師が横浜・日吉両教会を兼任し、「キリストの体」としての一致を改めて実感する新たな歩みが始まりました。これまでに4度の合同礼拝と役員会が開催され、礼拝後には両教会の歴史を学び、証言を分かち合う時が持たれています。

小高い丘に建つ横浜教会堂は、神奈川県から土砂災害特別警戒区域(いわゆるレッドゾーン)に指定され、7年に及ぶ協議



のり面工事の様子



横浜教会会堂前での記念撮影



合同礼拝後の分かち合い

と祈りの末、鉄筋で打ち込んだコンクリート枠にモルタルを吹き付ける「吹付法枠工」によって防災工事が完了しました。全境内地の売却も検討された困難な時期を経て、地域社会に対する教会の責任を果たす一歩が形となったのです。2025年5月18日、礼拝後に教会員がのり面工事の完成を一望できる場所に集い、イザヤ書26章「我らには、堅固な都がある」との御言葉を分かち合い、主こそ「ここしえの岩である」ことを深く心に留めました。

今後さまざまな課題に取り組みつつ、共に祈り、知恵を出し合い、主の御心を求めながら、私たちは宣教に励んでまいります。

■キリスト教児童福祉会
児童心理治療施設
こどもL.E.C.センター

松本祐二郎

(こどもL.E.C.センター
施設長)

近年、少子化が進行する一方で、児童虐待の件数は減少することなく増加傾向にあります。令和5年度の児童相談所における児童虐待相談対応件数は約22万5千件に達し、統計開始平成2年の約200倍という深刻な状況となっています。

児童虐待を経験したこどもたちは、不安や恐怖に満ちた環境で生活し、身体的・心理的な傷を負っています。その結果、自己肯定感や基本的信頼の形成が困難となり、対人関係や感情調整に課題を抱えたまま日常生活を送るケースが少なくありません。この問題は長期にわたる「生きづらさ」へと直結し、成長や社会参加に大きな影響を及ぼします。

児童心理治療施設(こどもL.E.C.センター)は、熊本県で唯一の児童心理治療施設です。児童心理治療施設は、乳幼児・児童養護施設等と同様に児童福祉法で定められた児童福祉施設であり、生活支援を基盤としながら、心

理支援や家族支援、施設内に設置してある分教室と連携した教育支援に加え、外部医療機関や関係行政機関との協働を図り、包括的な心のケアを行っています。近年は、ゲーム依存やインターネット依存など、新たな課題を抱えるこどもへの対応も重要性を増しています。

私たちは、こどもたちが日々の生活や職員との関わりの中で、こどもたちが「大人に受け止められて」という安心感を回復し、困難に直面した際に適切に「助けて」と言える力を育むことを目指しています。

『わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している』(イザヤ書43:4『新改訳聖書』)

この聖句のように、これまでの人生の中で受けたさまざまな逆境体験によって、神の愛や他者への信頼を見失ったこどもたちが、再び「愛されている」実感を取り戻し、より豊かな人生を歩めるよう、私たちは支援を続けてまいります。

私たちの実践の様子やこどもたちの日々はホームページやInstagramで発信中です。ぜひ、アクセスしてください。



改 宣 教 室

小泉基

(日本福音ルーテル
札幌教会校師・宣教室長)

中本秀行さん

(日本福音ルーテル拳母教会代議員、
社会福祉法人オリーブ理事長)

小泉 愛知県豊田市の障がい者施設オリーブンは、地域の小さな作業所から始まった福祉施設のグループですね。今は、どのような事業を展開しておられるのですか？

中本 1998年に任意団体スモールワンとして発足し、2005年にNPO法人化しました。2011年に新たに社会福祉法人オリーブンを設立し、事業を引き継ぎました。現在は障がい福祉サービス事業の生活介護事業として定員20名を3事業、居宅介護事業、定員7名のグループホーム、定員10名の児童放課後等デイサービス、相談支援事業などを行っています。生活介護事業ではお菓子工房、飲食店、ものづくり(機織り)などを通して、障がいをもつひとたちの働く場・社会参加の場を運営しています。NPO

法人の方もボースケと名称変更し、地域の方たちや生きづらさを感じている方たちの、居場所づくりをしています。

小泉 事業を通して大切にしておられることは、どのようなことですか。

中本 支える側、支えられる側という固定的な関係ではなく、「共に生きる」仲間としての関係性です。

小泉 中本さんが作業所を始めることになったいきさつを教えてくださいませんか？

中本 私は38歳になる知的に重度の娘がいいます。障がい福祉サービスなどほとんど無いなか、子どもたちの今後を見据えて数人の母親たちが親なき後のことも考えて居場所づくりをはじめたことが任意団体設立へとつながりました。

小泉 偏見もある中、大変なことも経験してこられたことと思います。

中本 始めたころは、福祉制度のない時代でし

たので、資金や人材の確保に苦労しました。一般のボランティアの方たちも長くは続かず、途方に暮れることもありましたが、そんな中でも地道に支えてくださったのは拳母教会の教会員の方たちで、本当に感謝しています。以前に比べれば偏見は少なくなっていますが、真の理解という面はまだまだ難しいところもあります。私自身が、本当の隣人になることができたら良いなと思います。関わりを続けていきます。

小泉 ありがとうございます。教の出会いと愛唱聖句を教えてください。

中本 私はクリスチャンホームで生まれました。特に祖母が熱心な信仰者で、自然な形で教会に通うようになっていました。愛唱聖句は「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ書43:4『新改訳聖書』)です。



中本秀行氏近影



浅野直樹 Sr.
(日本福音ルーテル市ヶ谷教会教師
・世界宣教主事)

サバ神学校での リーダーシップ研修

7月7日〜12日、アジアの15教会から22名がマレーシアのサバ神学校に集まり、「神学によってどんな世界を形成できるかなどのテーマで、ジェンダー正義や変革をもたらしリーダーシップについて意見が交わされました。

参加者は事前に9カ月間のオンライン学習で交流を深め話題を共有し、テーマへの関わりを深めた後、サバに来て実際に顔を合わせ、神学、ジェンダー正義、リーダーシップの交差点を、おののの教会やコミュニティの状況に照らし合わせて探りました。聖書研究やワークショップ、グループ討議を通じて、洗礼や全信徒祭司、按手といった神学のテーマを正当・平等の観点からディスカッションしました。

<https://lutheranworld.org/news/creating-just-future-responsible-theology-and-transformative-learning-asia>

当者キルネン牧師は責任神学について「神学が世界の形成にどう取り組めるかを問うこと」、「神学的作業が正義や尊厳、平等を実現するための取り組み」と述べています。

聖書の特定箇所が、家長制や望ましくない文化規範を正当化するのに利用されてきた過去に触れ、どうしてそうなったのかについて活発な議論がありました。参加者たちは状況を踏まえながら聖書本文と向き合うことで新たな視点を得ることができ、そうした聖書の読み方が不正に立ち向かうためのツールになることを学びました。

女性教職者は按手を受けていても制約を受けることがあるなど、指導的立場にある女性神学者が置かれた立場の難しさが繰り返し話題になりました。女性も男性も、ジェンダー正義と平等性を踏まえてリーダーシップを追求する。今回のプログラムの趣旨がそこにあることをディスカッションから確認できました。

ワークショップでは神学的振り返りと相まって、個人および地域リニユアルの糸口となり得る変革的(トランスフォーメティブ)な学習を体験しました。このセッ

第30回東教区宣教フォーラム報告

平和の担い手として ――祈りと行動を――

八木久美

(日本福音ルーテルむさしの教会代議員・宣教フォーラム実行委員会委員長)

1945年8月の戦争

終結から、今夏で80年を迎えます。世界では今も争いが絶えず、平和が脅かされています。武力で平和はつくれない――その言葉に耳を傾けながら、私たちは「平和の担い手」として何を思い、どう歩み始めるのか。その問いを胸に、第30回東教区宣教フォーラムが開かれました。

7月5日(土)午後、東京教会を会場に、「どう

ションでは参加者がリーダーとして行動するうえで役に立つアイデアを思いつく材料を提供し、ジェンダー正義、解釈学、セルフケア、プロジェクト企画、価値観ベースのリーダーシップ、LWF方策について学習しました。

キルネン牧師は「こう締めくくっています。『忌憚(きたん)のない会話ができ、お互いの励ましのもと、神の正義と恵みを映しだせる教会を目指そう』という決意をもつて、みなさんサバを後にしました。」



パネルディスカッションをする4名のパネラー

して戦争しちゃいけないの?」イスラエル軍元兵士が語る非戦論――」をテーマとしたフォーラムに110名超の来場者と、ライブ配信を通じて多くの方が参加しました(現在視聴可能です)。

礼拝説教「本堂に重要なこと」、聖歌隊「諸国民

諸国、世界の主よ」に続き、第1部では、イスラエル出身で秩父在住の家具職人であり、元イスラエル軍兵士ダニー・ネフセタイ氏が自らの体験に基づき、戦争と人権について語りました。彼はパレスチナ人を「敵」と教えられて育ち、軍に入隊しましたが、占領地で出会ったパレスチナ人たちが「自分たちと変わらぬ生活者」であると気づき、衝撃を受けたと語ります。

「敵」は教育によって作られる「想像力が平和をつくる」と語り、暴力の連鎖を断つには、誰もが「考え、疑い、行動する」

市民になる必要があると訴えました。家具職人として「ちゃぶ台を作る仕事になぞらえ、『武器でなく、顔を向け合って語り合える』ちゃぶ台をつくりたい」と語る姿も印象的でした。誠実に体験を見つめ、全身で語る姿から、非暴力と対話による生き方の力強さが会場に伝わってきました。

第2部では、ゼルダ・エドマンズ氏(ドキュメンタリー映画監督/通訳:中山康子氏、市原悠史牧師、内藤新吾牧師が加わり、パネルディスカッションが行われ、戦争と平和、加害と被害について語られました。

パレスチナでは、子どもたちが爆撃の恐怖の中で「標的」となり、封鎖により支援が妨げられ、飢餓の犠牲も増えています。一方、日本では難民支援や人道的活動への理解が十分な現実も浮き彫りになりました。「知る、想像する、語る」ことを恐れずに向き合う営みが、私たちが平和の担い手として歩む起点であるとディスカッションは静かに力強く語っていました。

「戦争を知らない時代」を生きる私たちが、どこに心をおき、他者の苦しみに目を凝らし、声を聞き、共に平和をつくるのか。週末の半日がその一歩

2025年九州教区 平和セミナー報告

中島和喜
(日本福音ルーテル
大江教会教師)

7月20日〜21日の日程で九州教区平和セミナーが熊本教会にて開かれました。

今年のテーマは「いのちを育む」です。「平和」という言葉から私たちがまず思うことは「戦争がない状態」です。しかし、私たちは戦争や暴力を知っている時、その心には大きな悲しみや怒りが沸き起ります。それらの感情は、平和への働きを後押ししてくれるものであり、ですが一方で自らを正義とし、あたかも神に成り代わるごとくに人を裁いていく危険を抱えるものでもあります。私たちが

すべきことは人を愛することです。そのことを確かめるために今回の平和セミナーでは私たちの心が平和で満たされ、平和に向けて出発しようと語り掛けるものでした。

そのために、サブタイトルを「こどものせかい」としました。こどもは平和を最も体現する者。こどもの世界は真に平和に満ちています。私たちはそこから学ばなければなりません。決して、こどもだからできることなどと思わずに、この人たちがこそが平和を知っているのだと。そのことを学ぶために、今回は講師としてこのとりのゆりかご当事者である宮津航(みやづこういち)さんに講義をしていただきました。ここのとりのゆりかごとは、慈恵病院が運営する、何らかの事情で自分で育てることのできない赤ちゃんを匿名で預かる施設です。宮津さんはそこに預けられた1人目のこどもでした。宮津さんの講演は、3歳で預けられるという悲愴(そうごう)感にあふれて



参加者との記念撮影

もおかしい話を、それでもこのとりのゆりかごが自分を救ってくれたという、愛の話として語って下さりました。私たちが悲しみからではなく愛から出発していくのだと。そのことの喜びを、宮津さんは身をもって教えてくれたように思います。

2日目にはそのことを参加者で話し合う時間が与えられました。皆さんの感想には、居場所、平安、平和、そういった言葉が語られ、私たちが愛を成していくのだという思いを、きつとそれぞれが受け取ったのだらうと思います。改めて、真に平和に満ちたセミナーであったとともに、ここから受けた平和を抱えて、今度は私たちが平和の使者として愛を果たしていきたいと感じる時でした。

サバ神学校でのリーダー研修報告

安田真由子
(日本福音ルーテル都南
教会信徒・アメリカ福音
ルーテル教会(ELCA)
ジェンダー正義コーデ
ネーター)

「これからは『責任ある
神学』を求めなければなら
ない。これまでの『無責
任な神学』への反省と共
に、『世界ルーテル連盟
(LWF)主催のリーダー
研修で発せられた言葉で
す。研修はTheology Center
(神学・ジェンダー正義・
リーダーシップ教育)と
題され、アジア各国の牧
師、信徒を対象に、昨年
12月〜今年6月にオンラ
イン研修、7月7日〜12
日に対面研修がマレーシ
アのサバ神学校で行われ
ました。

対面研修の参加者は
21名、スタッフを含め30名
弱。わたしは企画者の一人
として昨年5月から携
わつてきましたが、オンラ
インでの交流のみで直接
会うのは初めての人たち
と6日間一緒に過ごすの
は、良くも悪くも緊張を
伴います。現地に入るま
で、どんな一週間になるの
か、どんな人たちとどん
な言葉を交わすのか、落
ち着かない日々でした。

サバでは毎朝8時に聖

書研究から始まり、講義
やディスカッションを18時
半まで行い、神学、ジェ
ンダー正義、リーダーシッ
プについて学びを深めて
いく濃密な時間を過ごし
ましたが、中でも特に印
象に残った言葉や場面が
あります。

一つは、冒頭に引いた言
葉。これは、伝統的な神学
の「無責任」な側面が
人々の尊厳や命を奪つて
きた歴史を示していま
す。「人はみな神様に愛さ
れ、平等だ」と語りながら
も、人を分け隔て差別的
に扱うような「神学」で
す。例えば、「女だから」と
いう理由で牧師になるこ
とを許さないこと、「LGB
TQ+の人たちは罪人
だ、悔い改めるべきだ」と
裁く「神学」。(主に男性
の)牧師や教会役員がハ
ラスメントや性暴力を振
るつても、被害者の責任
は不問にし、被害者に「赦
しなさい」と諭す「神学」。
中絶を認めないなど、性
と生殖に関する健康と
権利(SRRH)をないが
しろにする「神学」。枚挙
にいとまがありません。
だからこそキリスト者一
人一人が、より責任ある
神学を模索、構築し続け
ていく必要があるわけで
す。

とはいえ、あらゆる人



参加者との記念撮影

の人権と尊厳が尊重され
る神学を追い求め、実践
していくことは簡単では
ありません。年長のスタッ
フが、「生き延びるため、
妥協しなきゃいけないこ
とも多々あった」と語つた
時、目の奥が熱くなりま
した。人権や尊厳を諦め
てしか生きられない命。そ
んな生を強制してきた教
会に、社会に、憤りを覚え
るのは当然ではないで
しょうか。

そんな教会を変えてい
くのが研修参加者たちで
す。熱心に話を聞き、鋭い
視点を持ち、活発に意見
を交わす姿には励まされ
ました。彼らは研修で得
たことを活かし、それぞ
れの教会で小さなプロ
ジェクトを行います。中に
は「妥協」や「諦め」を強
いられる場面もあるでし
ょう。彼らの働きが豊かに
実るよう、共に歩んでく
ださる神様に信頼したい
と思います。

全国ディアコニアネットワーク 夏のセミナー「聖書と選挙」報告

小泉嗣
(日本福音ルーテル
熊本教会・玉名教会・八代
教会牧師・全国「ディアコ
ニアネットワーク代表

「選挙」をテーマに「デ
ィアコニアセミナー」を開
催しました。その話し
合われたのは昨年春にオ
ンラインで行われた「デ
ィアコニアネットワーク運
営委員会の席上でした。そ
れから開催に向けて準備
を進めるも何度かの延期
があり、ようやく全てが
整い決定した開催日はく
しくも参院選開票日翌
日の7月21日でした。

『教会で選挙を語る』
と聞くと、もしかすると
気になる方もおられるの
ではないか？そんな危惧
がなかったわけではあり
ませんが、それ以上に日
本に生きるキリスト者と
して、どの政党が良い悪い
ではなく、どのような社
会を望み、つくっていく
か、その責任を果たすた
めに祈り、学び、語り合
う必要性を感じての開催
でした。

講師としてお話しした
だいたいの、日本キリスト
教団大泉教会の会員で
あり、教団や弁護士会、
地域等でさまざまな活
動をしておられる伊藤朝

日太郎弁護士です。残念
ながら参加を希望した
最近選挙権を得た世代
の姿はありませんでした
が、それでも全国から32
名の方が東京池袋教会に
集まりました。

5年ぶりに行われたセ
ミナーは永吉秀人牧師の
開会礼拝からはじまり
ました。永吉牧師はコロ
サイの信徒への手紙1章
24節のパウロの言葉から
「ディアコニアとはし
ていくことではなく、す
べきことをすることであ
り、それがキリストが負
つておられる痛みを共
に担うこと」につなが
っていく」と、私たち
に与えられた使命の
ようなものを提示して
くださいました。

続く講演で伊藤弁護
士は「聖書に選挙を尋
ねる、というのはなか
なかハードルが高いで
す」と前置きをしつつ
も、使徒言行録の使
徒選出やローマ教皇
の選挙など、キリス
ト教の「選挙」の歴史
にはじまり日本の選
挙の歴史までをおおま
かに、そして現行の
日本の選挙制度につ
いて詳細に解説をし
てくださり、そこから
選挙権を持つ私たち
に「できること」「な
すべきこと」を丁寧
にお話しくださいまし
た。特に印象

に残っているのは、「選挙」
とは開票が終わるまでを
言うのではなく、むしろ
開票が終わった後が大切
であるということでした。
私たちには、自分が選
んだ候補者が、また選挙
で選ばれた議員が、選挙
活動中に何を発言し、そ
の言葉を選挙の後にどの
うにかたちにするか、ま
たしなかつたかをしつ
かりと見つめ、そして
本人や社会に声をあげ
る責任があるというこ
とを学びました。講演
の後、グルー

プに別れて「イエスさま
が望む社会とは？」「生
きやすさとは？」など
について交わり、分かち
合いの時を持ちまし
た。参院選の結果をど
のように受け止めるの
か？それぞれ思うところ
はあると思いますが、選
挙が終わった今から、キ
リスト者として、祈り、
聖書に聞きつつ、なす
べきことをしつかりと
なしていきたいと思います。

講演をされる
伊藤朝日太郎弁護士



講演会を聞く参加者